

『元禄世間咄風聞集』所載の医薬学関連の咄

浜田 善利

『元禄世間咄風聞集』は東京大学文学部国文学研究室に蔵されていて、『世間咄風聞集』の題で一括整理されている写本の翻刻である。本書は校訂者の長谷川強氏により校注を付し『元禄世間咄風聞集』と題して、一九九四年一月に岩波文庫から発刊されている。⁽¹⁾『世間咄風聞集』は他に伝存が知られていない本であるから、今回の発刊が初めての公刊となる。

本書は全部で十一巻から構成されており、元禄七年（一六九四）から十六年七月までの咄を収録したものである。刊本に添えられている解説によると、主として江戸の世間咄の聞書であり、聞書の元になった話者は、老中から、高級旗本、碁打・掾校やいろいろな芸人らしい人物に及んでいる。

話の内容は、

- 一. 大名・旗本関係、二. 生類憐み令関係の話、三. 落首・落書、狂歌、四. 民間のニュース、五. 巷説、六. 犯罪、七. 奇談・怪談・由来談、八. 落し話・巷説の体裁をとった落し咄、九. 雑知識・民間療法・地名・産物など、に大別される。

本報では、主としてこの九.の中から、医薬学に関連した咄を抽出して、その内容を検討した。関連性があると考え

られる咄は全部で二七話あり、同じ内容のものをまとめて全体を一五項目に整理した。

私は先に『耳囊』に記録された民間療法を検討して、本誌に発表した。⁽²⁾『耳囊』は一八世紀から一九世紀にあたる天明年間から文化年間にかけての三〇余年の聞書であるのに対して、本書は一七世紀末から一八世紀初頭にかけての記録である。したがって本書は『耳囊』よりおよそ一世紀前の江戸の咄と考えることができる。

本書の意義について、校訂者は解説の末に次のように記している。すなわち、「現在残って利用されている記録書類は、このような書留の多くから公的な記録、社会的な影響の大きい事件などを抜いて整理されたもので、そのもとなつた雑記類は埋れ、捨てられたのであろう。本書はその希有の生残りというべく、諸方面それぞれの関心にあわせて読めば、面白い収穫が期待できよう。」と。

本研究の底本とした岩波文庫の刊本には、校訂者の詳細な注がついている。その中で、内容を理解するのに直接に参考になると思われるものは、本文の後に「校注」として引用した。そして、その後に検討を加えた。また、校訂者によって全編にわたって、巻数を漢字の数字で、各巻毎にその中の各項目の通し番号を算用数字でつけてある。この二種の数字の組み合わせによる表示は、所在の検索に便利であるから、本研究でもそのまま引用して、タイトルの下に入れて示した。

(一) 疱瘡の咄

◎疱瘡神の呪い(一〇二)

一 午のくつ(沓)を疱瘡仕候ものに、男には左、女には右にふませいわい(結)付、其先を壱寸切候て東之方の川にすて、川なき所にてはみぞ(溝)にすて、扱疱瘡仕付候時、其三尺四方に深さも三尺に穴を掘り、其内にうづめおき候へば、なるほど疱瘡輒仕取申候由、若殿様御咄被遊候。

〔校注〕 疱瘡―天然痘。

午の沓―馬にはかせる沓で、藁であんだもの。

【検討】 タイトルにあるように呪いである。したがってその効用を云々することはできないが、江戸時代にはこのような療法は珍しくなかったようであり、日本の田舎で、地方によっては、この前の戦争の直後くらいまでは、これに類する呪いがまだ残っていたと思われる。

例えば、その頃まで熊本県玉名市内では、麻疹(はしか)の予防に、ご飯を炊いて中味を御櫃にあけた後の熱い釜を、子供の頭からすっぽりとかぶせることがあった。

◎ 疱瘡の薬 (一 12)

一 神原越中守様御方に名譽の疱瘡の薬有之由、加藤右京様御咄也。

〔校注〕 神原越中守―千八百石で、駿河国久能(静岡県)の住。

加藤右京―伊予国新谷(愛媛県大洲市) 一万石。

【検討】 名譽の薬とあるが、惜しいことに薬の内容が記録されていない。

◎ 疱瘡の薬 (一 31)

一 疱瘡の妙薬神原越中守様に御座候由。

(一 12と同事)

◎ 京極高豊因縁の死 (一 14)

一 京極備中守様於道中御疱瘡にて御死去成候。御子息当年御三つ被為成候由。備中守様御父刑部様御事も御疱瘡御仕付於道中御死去、刑部様・備中守様御年四十にて四月に御死去、刑部様御死去之節備中様御三つに被為成候由。

〔校注〕 京極備中守―讃岐国丸亀(丸亀市) 六万一千七百石。元禄七年五月一八日死、四十歳。

刑部一寛文二年(二六六二)没、四十歳。

【検討】二人とも道中において疱瘡により四十歳で死去したという話。それを因縁めいたものとして記録している。当時そのように取り沙汰されたものであろう。

(二) 疫病の咄

◎疫病流行と珊瑚珠(五36)

一 松平越後守殿在所、越後国とい川近辺に一村疫病はやり、此所通り候得ば十人之内九人は煩付相果申候。依之越後守殿御参勤之時分、此所御よけ御通り不被成候。御供立之内此所通り不申候ては不叶義御座候て、七十人通り候得ば、右之内六十九人は煩付相果申候。残る壹人は終に煩付不申、堅固に御座候。いか様成義にて可有之かと穿義致見候へば、此もの巾着之緒留にさんごじゅ(珊瑚珠)を付罷有候。改見申候得ば、右之さんごじゅ、身に付候方色替り白く成候由。

〔校注〕いとい川―糸魚川市。

【検討】ここに登場しているのは、薬物ではなくて飾りの珠である。珊瑚は、『本草綱目』第八卷にあり、集解に「変紅色者為上、(中略)碧色者亦良。昔人謂碧者为青琅玕、俱可作珠」とある。主治は「去目中翳、消宿血。為末吹鼻、止鼻衄。明目鎮心、止驚癇」とあるが、疫病と関係はなさそうである。したがって、話に記録されている珊瑚珠と疫病との因果関係はよく分らない。

◎疫病神退散の呪(五46)

鐘輿

松田□衛門咄

一 元禄十三年十二月、伊勢宮川にて旅僧来り渡守に申候は、「あとより紺之だいなし着たるもの可參。川を渡す事堅無用に可仕」と申候。渡守申候は、「夫共に往還申候儀に御座候へば、無理に渡す間敷とは難申候」。旅僧申候は、「此節は此文字を見せ候へ」とおしへ立去り申候。其あとより紺のだいなし着たるもの參候て、「船にのり度」由申候に付て、船頭再三辭退申候へ共、とかく乗り可申と申候故、右之文字見せ申候処に早速立退申候由。是疫病神にて御座候由。

〔校注〕宮川―伊勢市西北を流れ伊勢湾に入る川。

だいなし―下男などの着る筒袖の、多くは紺無地の着物。

【検討】この咄から連想されるのは、蘇民将来と巨旦将来の話である。鳥羽市や志摩郡などでは、主として漁村の家の玄関に「蘇民将来子孫の(之)家」と書いた板をはる風習が今も残っているが、それと何か関連があるのかも知れない。

◎艾の効用 (八一〇)

土田宗元咄

一 もぐさ(艾)をへそ(臍)に昼夜当候へば疫病付不申候。惣躰もぐさをへそに当候へば、腹あたゝまり寝冷など不致候よし。

【検討】もぐさ(艾)はヨモギ(キク科)の葉の裏にある毛を集めたものである。この艾をただ臍に当てておくだけでは温まらないが、灸による治療効果からの連想に基づいたものとしか考えられない。本法は薬物を用いた呪いであろう。

(三) 霍乱の咄

◎蓬の効用 (八一一)

田中権左衛門咄

一 よもぎ(蓬)を懐中いたし候へば、くわくらん(霍乱)不致もののよし。

〔校注〕くわくらん―暑氣当りによる、日射病や急性の下痢。

【検討】前項(八10)と同じく、呪いに類するものと思われる。ヨモギはキク科の多年草で、日本では北海道から沖縄までどこにでも生えている。よもぎ(蓬)を懐中するということから、そのよもぎは生薬の艾葉であろう。もし霍乱にかかったとき、懐中しているよもぎ(艾葉)を煎じて飲んで効くのであれば、薬物としての効用になるが、よもぎ(艾葉)にはそのような薬効はない。

なお霍乱は、『傷寒論』の弁霍乱病脈証併治第十九⁽⁴⁾で、五苓散や理中丸方を用いているし、また『金匱要略』では雜療法第二十三⁽⁵⁾において、「凡中暈死不可使得冷得冷便死療之方」もある。

(四) 小便不利の咄

◎琥珀油の効(八03)

八月十九日小幡吉兵衛様御咄

一 小用つまりの御病人御座候に、色々御養生被成候へ共小便通じ不申候処に、こはく(琥珀)の油御用被成候へば押付通じ申候。さてさて小便つまりにはこはくの油妙薬のよし、被仰候。

〔校注〕こはくの油―琥珀を乾留してできる液。

【検討】琥珀は『本草綱目』第三十七卷⁽⁶⁾にあつて、主治は「通五淋」とある。また小便淋瀝に「琥珀為末二錢、麝香少許、白湯服之、或萱草煎湯服。老人、虚人以人參湯下。亦可蜜丸、以赤茯苓湯下」とあるので、薬効として利尿作用がある。しかし、琥珀の油というのは、同書にはない。校注には琥珀を乾留してできる液とある。琥珀を乾留するとコハク油がとれるが、江戸時代にはランビキを用いて蒸留することはあつても、琥珀を乾留したとは思われないから、この油は琥珀を浸した油(液)ではないかと思う。

(五) 傷の治療の咄

◎大傷の治療(一三三4)

一 戸田山城守様御中間、乱気のもの有之、とりさへ候半(そうらわん)といたし候処に、数ヶ所手負候由。初手にはな(鼻)よりおとがい(頤)まできられ、齒五まいおり候由。耳の根より切おとし、後に七ヶ所手負申候由。吉田自庵老弟子、山城守様御手外科療治にて既と本復いたし候由。山城守様御咄也。

〔校注〕吉田自庵―幕府抱えの外科医。

御手外科―戸田家抱えの外科医(自庵弟子)。

既と―底本難読。「既」字にて「きつ」と読むか。

【検討】外科の治療が優れていることの話である。単なる話題であるから、治療の内容については触れない。話者が自分の所の外科医の手柄として話したのかも知れない。なお、本復とあるが、切り落とされた耳も縫合されたのであるか。

(六) 目の治療の咄

◎座頭療治により目あく(二二28)

一 柴田檢校弟子二歳にて目つぶれ十六にて目明申候。其故は右之座とう播州に親類御座候付、三、四年以前に見廻に参候とて、遠州はま松の者伊達本随と申目医者、元は遠州の百姓にて有之候由。かの本随りやうぢにて早速目あき常の通に成申候由。依之柴田方へ申達候。すなわち江戸惣檢校に届け申候処に、一たん座頭に成申候てより、目明申候とてもぞく(俗)にかゝりし申法にて無御座候へ共、杉山檢校心入を以本のごとくぞくにかゝりし、路銀等とらせ故きやう

(郷)へかゝし申候由。めいよの目医者居申候由。目つぶれ年数ををくり申候ほどりやうぢ能仕候由。さりながら目によりなをり不申候目も御座候由。右は竹内善左(衛)門咄也。

[校注] 柴田檢校—未詳。

播州—兵庫縣瀬戸内側。底本「幡州」。

遠州はま松—静岡縣浜松市。

伊達本隨—未詳。

杉山檢校—「国花万葉集」に「道三かし 杉山」。惣檢校。

【検討】百姓あがりの医者が目の治療に優れていることの話。「目によりなをり不申候目も御座候」とあるので、かえつて真实性があるように思われる。話題としては、目の治療だけでなく、座頭で目があいた者の後の処置までも含まれている。

(七) 遺精の咄

◎遺精に悩む男(二三4)

一 或人毎夜いせひ(遺精)を見申候て、殊外草臥申候由。医者申候は、「其方は女の事や若衆の事を思ひ寝申候ゆへ、左様いし見申候。此後は何ぞつよき事をおもひ、あるひはをに(鬼)の事などを思ひ寝申候様に」と申候。かの男、「心得候」由申候。其後右之医者又参り見申候へば、前方よりなを草臥居申候付、「如何いたし候や」と尋申候へば、「其方御申之通、をにを事をおもひ寝申候処に、終夜をに□尻をされ候夢を見候てなを草臥申候。ケ様に草臥候はゞ本のごとくいせひを見候がましにて候」由申候。右は壬(うるう)二月廿一日、安藤出雲守様御咄也。

[校注] をに□尻をされ—鬼に男色の相手にされる。

【検討】インポテンツの反対のように見えるが、元気が良すぎるのではなく、これも一種の病気であろう。

(八) 奇病の咄

◎奇病(七五〇)

一 於京都珍敷病人有之候由。油小路二条上ル町、屏風屋七右(衛)門と申候者世悴長三郎。年拾二才に成候由。去る五月初比より煩付、夜は大熱出。しやうかん(傷寒)の様成煩にて御座候処に、十月計過候て腹中之内より物を申出し、何事にも当人より先に返事仕候。朝夕食事を本人とせり合申候。本人、「いや」と申候へば、腹中より、「くれよ。たべ可申」と申候。それともにひかへ候へば大熱出申候。色々悪口申候。本人、「腹中はり、いや」と申候へども、ぜひなく親共くわせ申候。療治・祈禱も仕つき申候処に、菅玄隆と申ししや(医者)、「大唐にもケ様之病人御座候。日本にては伝事不承候。見当り候書物候は、薬先用見可申」とて、薬箱取よせ候へば、「其薬いや」と腹中より申候に付、弥面白、六、七日つゞけて三貼づゝ用候へば、少づゝ声かれ、食事をもうばい不申候に付、夜昼茶のごとくさしつけ用候処に、十日めに長三郎せつちん(雪隠)に参候へば、長さ壹尺壹寸、ひたいに角壺本御座候天龍ごとく成もの飛出候まゝ、はねまはりかけまはり申候を打ころし申候。其からは薬種に成申候。

右は蒔絵師矢木二郎左(衛)門なる者一家にて申越候。

〔校注〕油小路二条上ル町―縦筋の油小路通と横筋の二条通の交叉点の北。中京区薬屋町。

しやうかん―熱病の名。

其からは……その殺したもののなきがらは薬になったというか。

一家―親族。

屏風屋と一家であつたので事情に詳しいというのであろう。

【検討】まさしく奇病であつて、よくわからない。なお、そのなきがらは何の薬になつたのか興味深いが、話題の中心からそれているからか、何も記されていない。

(九) 夕顔観音由来の咄

◎夕顔観音(七二一)

松寸

一 かしい村に夕がほのくわんおん(観音)とて有之、こん(建)立のため開帳有之候。隣郷の万民、江戸中よりも参詣人数しれず。扱又丸薬壱包廿四せんづゝいだし候由。此丸薬用候へば何に煩も快氣いたすと成り。殊外の繁昌にて候。

此観世音の由来を尋に、かしい村乙名の女房らい(癩)病を煩、何と養生仕候ても能無之、一兩年も煩難儀の躰にて、罷有処に、或夜夢相「想」に見候は、夕がほ畑に観世音有之候を見出しこん立仕、此ぐわん(丸)薬を用可申由にて、丸薬の法を明に見候由。是を用候はゞ快氣いたし可申由たしかに候。しかも夕がほ畑の内に光さし候処有之候に付、其所をほり見候へば箱壱つほり出し、此箱をあけ見候へば観世音有之候をこん立いたし、右之丸薬を用候はゞすきと快氣仕候由。此事世上に相知れ候ゆへ、開帳の節まいり候人多有之候由。

〔校注〕 かしい村―夕顔観音堂は葛飾郡の飯塚村―葛飾区水元飯塚町所在。

夕がほのくわんおん―『武蔵風土記稿』二十六に、寛文期に名主関口治左衛門等が、靈夢により大木の根を掘り観音銅像等を得てまつる、夕顔の号の由来不明という。

丸薬―『武江年表』元禄十五年の項に、春より同観音に参詣者夥し、村長の家より夢想の薬を出す、江戸所々の寺院へも五、七日ずつ出て開帳という。

乙名―名主。

【検討】夕顔観音の由来記であるが、丸薬の内容については、何も記されていない。

(10) 狐つきの咄

◎狐つきの狐を退治(一40)

一 内藤豊前守様御家来何某と申もの、つめの間より狐つき候付て、腕をあとさき強ゆい申候へば、其儘其間はれ候故、脇指にてはれ候所をつき切候へば、はれも引屋敷のうらに狐死候て居候由。

〔校注〕内藤豊前守―奥州棚倉(福島県棚倉町) 五万石。

【検討】以前は狐つきも病氣の一種だったが、その狐を落とす方法として変わっているので、咄の種になったのであろう。

(11) 朝鮮人参の咄

◎宗義倫病氣に大量の人参使用(一37)

一 宗対馬守様御病氣付て、九月朔日に人じん(参)百廿八匁御用被成候由。十日時分は八拾目に成候。其後五十めになり候へば、其儘元氣御おとろへ被成候故、又八拾目御用成候由。

〔校注〕宗対馬守―府中(対馬厳原町) 城主。元禄七年九月二十七日没、二十四歳。

人じん―朝鮮人参。宗氏は朝鮮貿易に当っていたから、大量に用いた。

【検討】一匁は三・七五グラムであるから、百廿八匁は四八〇グラム、八拾匁は三〇〇グラム、五十匁は一八七・五グラムにあたる。何の病氣であつたかは書いてないが、人参を一日量としてこれだけ使うと、まともに煎じたのであれば、効果よりも飲んで大丈夫であつたのかどうか疑問である。それとも九月二十七日に死去しているので、他に手の打ちようがなくて、やむなく使つたのであろうか。いずれにしても、高貴薬である人参をこれほど大量に用いること

ができたということに、話題性があつたのであろう。

(一一) 葉草の咄

◎毒ある枸杞(一四三)

一 くこ(枸杞)にはり(針)有之は毒のよし。老年立がよしと也。

【検討】クコはナス科の小低木である。この枝に刺状になつた小枝が出るのは、珍しい現象ではない。ただ必ず出るとも限らないので、刺状の小枝のない株を見た人がそれのあるクコを見ると異様に感じたのかもしれない。現実には誤つた認識である。

◎るうだの効用(一三二)

一 るうだと申、衣服・書物などに入召置候へば、虫喰不申候由。衣類などは色違不申候由。其外具足・諸色に入置候由。

【校注】るうだーありた草。アカザ科の一年草。わが国への渡来は天正年間(二五七三―九二)、寛永年間(一六二四―四四)の二説あり。駆虫薬。

【検討】「るうだ」は『和漢三才図会』第九十三、⁽⁷⁾芳草類の耆婆草(ぎばさう、るうだ)で、「按天正年中蛮人此草将来名留宇太」とあり、効用では「能治瘡疥折傷悪腫及悪虫被螫者擣葉傳之置床褥下避蚤虱納書篋中蠹不生」とある。この「るうだ」は、校注にあるように、アカザ科のアリタソウであつて、渡来には二説がある。アリタソウは南アメリカ原産の一年草で、昔、滋賀県の有田で栽培されたのでこの名がある。現在帰化植物として各地に見られるのは、ケアリタソウである。なおアメリカアリタソウはヘノポジ油を含有して、駆虫薬とされた。

(一三) 医書の咄

◎聖濟総録、野間玄琢(二二一)

一 聖濟総録(シャウ□イソウロク)、此書半井炉庵様御家にならで御座なく候由。とうの宋和天子の御編集(ヘンシウ)の由。

群方類藁(クンホウルイカウ)六拾冊ほど、野間玄琢様式拾ばかりの御年御つくりなされ候由。書物百部ほどの御抜書の由。玄琢様御年十五にて禁裏へ御りやうぢに御参内の由。十八にて道三様御相談相手に御成被成候由。御一生の内御りやうぢ人壹万五千人ほどにて御座候由。右は野間安雪様御咄也。

〔校注〕聖濟総録―医書。二百卷。宋の政和中の勅撰。

半井炉庵―驢庵が正しい。半井成近(驢庵、寛永十六年没)が寛永十四年に家蔵の聖濟総録の欠を官本で補写(寛政譜)。当時の驢庵は半井成明。

群方類藁―医書。六十三卷。野間玄琢著。

野間玄琢―曲直瀬玄朔門。秀忠に仕える。正保二年(一六四五)没、五十六歳。

道三―曲直瀬玄朔。初代道三の妹の子で、道三の家を継ぎ、道三を称した。寛永八年(一六三一)没、八十三歳。

野間安雪―野間安節。『御当代記』元禄三年、「九月二十一日、被召出候医師衆、二百俵づつ被下候、……野間安節へ是は戸田采女在所より御呼出し被成候」。『

【検討】医書の『聖濟総録』が半井家にあつたという話。および、『群方類藁』を著した野間玄琢の話。

(一四) 医者 of 咄

◎石町四丁目 to 医者多し (二二六)

一 こく町四丁目 菴丁 to 医者七拾八人御座候由。此前はなを沢山 to 有之候へ共、唯今は右之通に候由。杉谷勾当咄申候。

〔校注〕こく町四丁目―本石町四丁目。現中央区日本橋本町二・三丁目。

杉谷勾当―未詳。勾当は座頭の上の官。

〔検討〕石町 to 何故に医者が多数集まつたのか、その理由には触れていない。

◎坊主より医者に転じた高木桂印 (五〇五)

松寸咄

一 肥前国佐賀に連生寺と云門徒坊主、後医者に成り高木桂印と名を改、肥前一国におゐて上手の誉を取、丹後守様江

戸御上下に御供被仰付候由。其弟子に馬渡宗雲とて是又江戸にて能療養致候由。

〔校注〕連生寺―佐賀市伊勢町の浄土真宗本願寺派の蓮生寺か。

丹後守―鍋島光茂。肥前国佐賀(佐賀市)三十五万七千石。元禄十三年没。六十九歳。

〔検討〕高木桂印という坊主あがりの上手の医者 of 話。

(一五) 長寿 of 咄

◎朝鮮長命 of 地 (一三六)

一 朝鮮之内四万石之所に百に成候者 壱万人有之由。くこ(枸杞)沢山有之所にて、朝夕湯水にもくこを入給候由。夫故長命に有之由。

〔校注〕くこー葉・根皮・種子を、茶にしたり酒に浸したりして用いる。強壯・解熱・強精等の効能ありという。

【検討】クコの薬効として理解できる。ただし、校注に種子とあるのは誤りで、果実が正しい。

◎南部領内長寿者の数(五〇三)

- 一 南部御領内に、八十歳以上之者七百四拾七人、九十歳以上之者百五拾人、百歳以上之者七十五人、百式十七歳之者
老人御座候由。

〔校注〕南部―南部信濃守行信、盛岡十萬石。南部氏領は、現岩手県の南方を除き、青森県東部と秋田県東北部を合わせた地。

【検討】具体的に年齢と人数をあげて長寿者が多いという話。

◎八十七歳、赤坂・護国寺日帰り(五四二)

- 一 武田一句本名間宮元禄十三年迄に八十七歳成り被申候。赤坂より護国寺へ歩行にて日帰り被致候由。

〔校注〕武田一句―未詳。

護国寺―神齡山。真言宗。当時綱吉の信仰があつた。文京区大塚五丁目。

【検討】八十七歳の人がいかに元気がよかつたかという話。

◎長寿で息子出生の者(五五一)

巳ノ二月十八日

- 一 天野弥五衛門殿当年八十一に成り被申候。妾腹に御息出生也。前田安芸守殿七十六、堀田河内守殿七十七、何も御
息出生之由。右三人共に二月に出生被致候。

〔校注〕天野弥五衛門―長重。三千三十石。当時旗奉行。宝永二年没、八十五歳。

前田安芸守―直勝。二千二百石。大目付より当時寄合。宝永二年没、七十六歳。

堀田河内守―一輝。五千五百石。宝永二年没、七十七歳。この二名は公に届けた年齢と差があるか。

【検討】 高齢の人に子供ができたという話。

◎米之守（五五二）

同月同日

一 天野弥五衛門殿巳に八十一御公儀へは八十になり被申候。御内室も八十に御成候由。依之米之守出し被申候。右之守八十之字は弥五衛門殿、八之字は御内室書被申候由。

〔校注〕御公儀へは八十一幕府への届けでは八十歳。

米之守一八十八歳になった祝いに、米の字を書いて諸方におくる餅。本項は八十一歳というので不審。

【検討】 米の守を行ったという話。

◎子孫長命繁栄の一家（十一一）

織田貞置様御咄 八左（衛）門御取持

一 市川孫衛門殿御代官所信州三塚村、瀬下七左（衛）門母、元禄十五年ノ年迄行年九拾六歳存命、子供九人。

一 女八十歳 嫡孫六十四歳 次男七十七歳 三女七十四歳 四男六十九歳 五男六拾七歳 六男六十三歳 七男六十

一歳 八男五十八歳 九女五拾七歳

一 孫四十七人 一曾孫百十人 一玄孫三十四人 都合式百十一人堅固に罷有候。

〔校注〕市川孫衛門一 元禄八年七月より代官。正徳五年没、六十七歳。

一 信州三塚村一長野県佐久市三塚。

【検討】『宝永文正』（宝永元年刊）はこの一家の繁栄をしるした書というから、これは有名な一家であった。

以上の他に、博物学としてみると関係がありそうなものに次の咄がある。タイトルだけをあげておく。

◎河童の肉(七16)

また病気の治療と直接の関係はないが、病気に付随する別の話題として、次の咄がある。

◎徳川綱誠病中の怪(五10)

◎綱誠死の前後に狐(五11)

文献及び註

- (1) 長谷川 強校注『元禄世間咄風聞集』(岩波文庫) 岩波書店、東京、一九九四。
- (2) 浜田善利『耳囊』に記録された民間療法、日本医史学雑誌第三九卷第二号、一七九〜二一六頁、平成五年。
- (3) 明・李時珍著『本草綱目』(校点本第一冊) 五〇二頁、人民衛生出版社、北京、一九七五。
- (4) 漢・張機著『注解傷寒論』九五頁、人民衛生出版社、北京、一九八二。
- (5) 漢・張機著『金匱要略方論』五九頁、人民衛生出版社、北京、一九八二。
- (6) 明・李時珍著『本草綱目』(校点本第三冊) 二二五二頁、人民衛生出版社、北京、一九七八。
- (7) 寺島良安著『和漢三才図会』下、一三〇一頁、東京美術、東京、一九七三。

(熊本工業大学)

著者の浜田善利先生は、平成七年四月二十八日に逝去された。本論文の原稿は、熊本工業大学の北原一太教授を援けて研究室で遺品の整理に当たられたボランティアの長沢京子氏によって(平成七年の医史学会で口演後、医史学雑誌に投稿の予定)というメモを伴って発見され、編集委員会に送られてきた。本稿は正規の審査の手続きを経て、ここに掲載するものである。校正は長沢氏と編集委員の一人が独立に行って万全を期した。

なお、□の形で填字されていない箇所が若干残っているが、これは著者が利用された原典での形をそのまま引きついだものである。(編集委員会)

Medical and Pharmaceutical Tales Recorded in “Genroku- Sekenbanashi-Fubunshu”

by Toshiyuki HAMADA

“Genroku-Sekenbanashi-Fubunshu” consists of eleven volumes and was written from 1694 to 1703, in the Edo Period. The original book was kept at the Faculty of Literature, Tokyo University. In 1994, this book was first published as one of the Iwanami-Bunko Series.

I studied the tales recorded in this book and found that twenty-seven of them were concerned with medical and pharmaceutical sciences. In these medical and pharmaceutical tales, there were several kinds, relating to such matters as spells to cure or prevent illness, curious sicknesses, episodes regarding the origin of remedies, medicinal plants and crude drugs, medical books, doctors and surgeons, persons who lived long, and so forth. It was difficult to explain about the spells which were thought effective to cure illness, but I could gain an understanding that Japanese people lived such lives in the old days.